

財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

NO.13

目 次

中国民族舞蹈と稲作文化（6）	前雲南省舞蹈家協会常務副主席	劉 金吾	
二 稲作文化の中の祭祀舞蹈（続き）			
8. 各民族の新米祭			2
三 稲作文化の中の民俗舞蹈			
序章			5
自然人アイヌ こころの歌と踊り	アイヌ文化伝承者	四宅 豊次郎	7
平成 16 年度黛民族舞蹈文化財団活動予定			11

はじめに

「中国民族舞蹈と稲作文化」は、故黛節子前理事長が生前、我が国の民族舞蹈は稲作文化と切り離して考えることは出来ないという動機から、同じように稲作文化を持つ中国雲南省の少数民族に関心を抱き、1980年代より中国雲南省舞蹈家協会との交流を始められました。当時舞蹈家協会の事務局長を務められ、後に副主席になられた劉金吾先生とは殊の外親交を重ねられ、将来二人共同で日本と中国の稲作文化に関して本を書きましようとの約束されましたが、残念なことに1995年黛節子先生は亡くなられました。その後劉金吾先生はその約束を守られて、中国雲南省地方の稲作文化に就いての本を執筆されました。

当財団も黛節子先生の御遺志を汲んで、出版のお手伝いをさせて頂きました。そのお礼にと、劉金吾先生は日本における翻訳と、発表について当財団が取扱うことを許可して下さいました。

中国民族舞踊と稲作文化（6）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席

劉 金吾

二 稲作文化中の祭祀舞踊（続き）

8. 各民族の新米祭

雲南省に住むほとんどの民族は穀物の収穫の後に新米祭、新嘗祭(初物を味わう祭り)、収穫祭、食新米祭を行い、蔵の神を祀ったり、稲束を捧げたりする。これらの祭の名称はそれぞれ異なっているが、それらすべてが穀物の収穫の後の最も重要な農業祭祀の活動であることはまちがいない。豊年をもたらした神霊や祖先へのお礼、そして穀物の種を探したり守ったりした神霊、祖先、家畜などへの供え物にはすべてその年の収穫物があてられる。それと同時に人々が一年苦心して働いた後には収穫した穀物に対して自然に湧きおこる一種の歓喜の情がある。それらの祝祭活動はあるものは集落を単位として共同で行われ、またあるものは各戸ごとに祭壇をもうけて各家で行われ、舞踊や音楽を伴うもの、祭司が祝詞を吟じるもの、戸主が独自に祭るものなど様々である。

ジノ一族はほぼ旧暦の8月から9月の間に食新米祭を行う。祭の具体的な日程は各家がそれぞれ決定する。祭日の朝に各家では自分の田から集めた稲や瓜、豆、野菜類を持ち帰り、よく煮炊きをしてから卓の上に並べる。家長が帽子をとり、衣服を左肩に掛けて祝詞をあげ、祖先と村落の神、鍛冶の神、白ロウの神、モーピー神等を祀る。その後で卓上の供え物を七つに分け、そのうちの三つを、鍋を支える三つの石の前に供え（これはかまどの神に先に召し上がってもらうため）、残りはいろいろの神を祭るためいろいろの四隅に置く。親戚や友人と一緒に食事をしてもらい、食べながら新米祭の歌を歌う。ジノ一族には次のような伝説がある。昔々、ジノ一族がまだ米を作ることができなかった時、二人の兄弟がいた。家は貧しく、山菜に頼って日々を暮らしていた。ある日兄弟が飼っていた黄色い犬がどこかへ出て行って戻ってこなかった。五日後にその犬は突然帰ってきて尻尾をふりながらワンワンと吠えた。兄弟は犬をそっとなでてやったが、尻尾に一粒の稲の実がついているのに気が付いた。二人はその実を手にとって半日間も眺めていたが、その黄金色の種子は他の植物の種子とは違うと思い、一人が口に含んで味見をしてみた。三日間もなめっていると口の中が甘くなってきたので種を地面に埋め、どう成長するか見ることにした。兄弟は懸命に土を耕し種を蒔くと三日目には発芽し、秋になると9本の稲穂ができたが、二人は食べるのが惜しくなった。そんなある日、一人の白髪の老人が杖をついて足をひきずりながら兄弟の家に来た。体中がうみだらけで目の輝きを失っているその老人は兄弟の家に何日か泊めてほしいと求めた。兄弟はこう答えた。「私たちはとても貧しくて、お泊めすること以外に何もおもてなしすることはできませんが…」老人は食べ物のは心配しなくてもいい、ただ泊めてくれさえすればそれで十分と言った。兄弟は野草と幾束かの稲穂を老人の食事として差し出した。老人はそれらに手をつけず、鍋に火をかけるようにいうと腰から一粒の白米を取り出し鍋の中に入れ、

上からふたをした。煙が立ってからふたを開けると真っ白でよい香りのする白米のご飯が炊けていた。翌日の早朝、老人は立ち去るときこう言った。「おまえたちは心根がやさしいので稲の種をあげよう。その種を蒔き、雑草を刈り、稲の倉を建てなさい。三日目に稲穂を稲の倉の中に入れ、芭蕉の葉をその上をかけ、藤のつるで稲の倉の戸をしばって5日たったらまた行ってみてごらん」兄弟が老人の言うとおりにしてから5日目に倉の戸を開けてみると稲穂は倉いっぱいの米に変わっていた。兄弟は喜んで「ハオシーザオ、ハオシーザオ！」（新米が食べられる）と叫んだ。

ラフ族はずっと以前には狩猟と野草や野生の果物の採集で日々を過ごしていた。ある日、天神のイエサが下界に降りてきて、ラフ人が飢えて気力が萎えているのを見て、こう言った。「おまえたちが良い日々を過ごしたければ稲を植えることを学ぶがよいそしてこうも言った。「稲もみが欲しければキジバトを捕まえなければならない」ラフ人がキジバトを捕まえてそのうを切り開いてみるとそこから稲モミがたった一粒だけ見つかった。稲モミがあまりに少なく、ラフ人が皆がっかりしていると天神のイエサが又言った。「一粒の稲モミは六ヵ月後には千粒となって収穫される」そして稲モミを蒔く方法を詳しくラフ人に教えた。8月になると確にお碗いっぱい稲がとれた。その後人々は山地を開墾し、稲モミを蒔いた。そして次の年の8月にはラフ人の住む山は至る所黄金色の稲穂で埋まっていた。ラフの人々は天神のイエサに感謝するためその日に収穫した新米をよく炊いて天神に供え、夜には皆で芦笙舞を踊った。そして踊りながら次のような歌を歌った。

汗水をたらして作った金のようなお米、
金のお米はラフ人の飢えを追い払ってくれた。
すすんで後代に福をもたらししてくれた先輩たち！
私たちは歌い踊ってあなたたちを祝福する。

またある説によると稲モミは犬が天から持ってきたもので、それゆえに炊き立ての新米はまず天神のイエサに供えられ、その次に犬が食べ、最後に人間が食べるものとされた。人々は夜を徹して夢中で朝まで踊り続けた。それはラフ人に稲の栽培を教えてくれた天神のイエサに感謝し、稲モミをもたらしした犬に感謝し、同時に豊かな収穫を祝うためのものだった。

ミャオ族の新米祭は旧暦の8月15日過ぎに行われる。とれたばかりのトウモロコシと新米から作ったご飯を中心に酒や肉を供えて天神と祖先等の心霊に感謝し祭る。

ハニ族の新嘗祭は旧暦の8月に行われる。この時期には集落単位の祭祀は行われず、一切の祭祀及び慶祝行事は各家庭で催される。言い伝えによるとこの祭は人類のために五穀の種と六畜の仔を探し求めたハニ族



ジノ一族の祖先を祭る儀式

の祖タポーと心の優しいその子オーロのために行われる。祭祀の歌の中ではつぎのような詞が唱えられる。

はるか昔のハニの祖先よ
新しい吉日、このよき日、
8月の龍の日を選びました。
始祖の辛苦を忘れないために
オーロの恩恵を忘れないために
ハニは8月に新米を食べるとき
先ずタポーとオーロをお祀りします。(註①)

ヤオ族の新嘗祭は6月5日か6月6日に行われる。祭りの当日、人々は初物の稲やトウモロコシを摘み取り、酒や肉も準備して親戚を招待し、共に初物を味わう。祭りは天地と祖先を敬うことから始まる。その意味することは天神、地神、祖先の加護に対する感謝であり、穀物が豊作であったので先ず天地と祖先に賞味してもらおうと初物を捧げるのである。続いてご飯を一椀犬に与える。それは犬が穀物の種を持ってきたから。言い伝えによると「むかしむかし、ヤオ族の祖先たちが海を渡っていた時、狂風が四方から沸き起こり、人々を乗せた船を弄んだ。人々は懸命になって岸に這い上がったが、穀物はすべて水中に没してしまった。皆が将来の生活に不安を抱いていた時、その中のひとりが犬の尻尾にくっついていて幾粒かの穀物の種を見つけた。そこで人々はその幾粒かの穀物の種を地面に蒔き、心を込めて世話をすると秋にはたくさんの収穫があり、ヤオ族の人々はその後もずっと生き延びることができた。それ故に毎年、秋の収穫の時に人々は自然に犬の恩恵を想い、犬の功労に報いるのである。(註②)」その後で年齢の順に従って新米のご飯を味見する。

リス族の新米祭は通常秋の収穫がすべて終わった後で行われる。リス語で“ザシザ”と言い、その意味は“新米の飯を食べる”である。秋の収穫が始まる時にこの祭りが行われる場合もある。新米祭のその日、新米をよく炊き、肉を煮てそれらを先ず犬に食べさせる。犬が新米のご飯を食べている間、人々は祝詞を唱える。感謝とごほうびがリス族に穀物の種をもたらした犬に与えられる。伝説によると大昔に洪水の氾濫があり洪水が引いた後集落も穀物も人も皆なくなってしまった。ただヒョウタンの中に隠れていた兄妹と二人の飼っていた犬だけが助かった。子孫の繁栄のため兄妹は結婚し、犬に天に行って農作物の種をとって来るようにいつけた。犬は天に昇り種をとった後その種を耳にはさみ、大地の上に戻ってきた。この時から大地でまた穀物がとれるようになった。

トウモロコシの収穫の後半月以内に新米祭をするリス族もいる。祭りの間は酒を温めてブタを殺し、皆集まって昼夜を問わず飲み食いをして歌ったり踊ったりする。

ナシ族の新米祭は通常旧暦8月15日から25日の間に行われる。祭りが始まると各家の家長は自分の田の中からたくさんの穂をつけた稲株を選び出し、それを持って家に帰る。脱穀の時には稲穂を打ってはならずただ小さなお椀を使って稲モミをそぎとるようにする。その稲モミも日に晒してはならず、鍋にいれて乾燥させる。その後で石臼を使ってつき、新米にする。この方法は正式な収穫ではないことを意味している。新米のご飯が炊きあがると先ずかまどの神に供え、その次に祖先に供え、その後でお椀に半分よそって犬に食べさせる。(その理由は犬が稲モミを持

って来たという言い伝えによる)そして最後によりやくその家の家族が招待した親戚と一緒に新米を食し、収穫を祝う。この時に新米の中に少し古米を混ぜる。これは新旧の引継ぎを表すものである。上に述べたような各家毎の新米祭の他に三朶閣と黒龍潭でそれぞれ新嘗祭が催され、各集落で順番に行われる。青壮年は北岳廟に行き、そこで新嘗祭の祭祀を行う。“三朶(サンドゥオ)”とはナシ族の守護神のことであり、龍潭には水神がおり、北岳廟とは祖先神の廟のことである。新嘗祭とは即ち各地の心霊や祖先が豊作をもたらしてくれたことに対する感謝の祭りに他ならない。

チンポー族は毎年旧暦の八月か九月に穀物が熟した頃チンポー山の集落で喜びに溢れて先ず山の官家で新米が食べられ、目代鬼に新米が供えられる。その後、農民の家で新米を食べるとき、中心やまわりの集落から近親を招待する。新米でご飯を炊き、水や酒、新鮮な鶏卵や干魚等を準備した後、トンサに祝詞をあげてもらい家の守護神の加護を感謝する。夜には皆が囲炉裏を囲んで車座になり、よい香りのする新米のご飯を食べ、甘い米酒を飲み、老歌手が太陽神の恩恵を賛美し、その家の人々や家畜が繁栄して五穀が豊作になるように歌うのを聞く。老歌手はさらに祖先たちがどのようにして稲モミを手に入れ、種の蒔き方を習得したかを記した物語を吟じる。

はるか昔、チンポー族の祖先たちは木に実った果物や、けものの肉だけを食べて暮らしていた。太陽神はそのような人々に稲モミを送り、稲穂は地に満ちるようになった。人々は飽食して稲の管理を怠り、野獣たちが稲を踏み荒らしたので稲たちは悲しみ、かつ憤って自分たちの母親である太陽神のもとに戻ってしまった。大地にはたちまち飢えた人の群れが見られるようになった。そこで人々は猫と犬を天に送ってこの窮状を告げ、稲がまた地上に帰ってくるように懇願することにした。そのようなわけで新米祭は先ず太陽神と祖先を祀り、猫と犬に感謝して褒美を与えてから皆が祭りを祝って新米を食べる形式を有することになった。

註① 盧朝貴著《哈尼族哈尼支系歳時祀析本主文化》、《雲南民俗集刊》第四章参照。

註② 黄鈺、黄方平著《瑶族》、民族出版社 1990 年版。

三 稲作文化の中の民俗舞踊

我々の先人たちが農耕経済の時期に到達したころ、特に稲作が始まってからは季節、気候、日照、降雨等の自然の力に依存する割合が特に大きかった。風雨が順調で適切な時期に田植えをして病虫害に見舞われなければ豊作になった。そうでなければ収穫はなく、一年のほとんどを飢えと共に過ごさなければならなかった。不可思議で予測できない自然は人知を超え、それゆえに天神、地神、集落神、



ドーアン族の新米祭

竜王、太陽神、穀物神等が考えだされた。人々は心靈の恩恵と庇護を祈り、それによって五穀豊穡、人畜安穩がもたらされると考えていた。祈りの表現形式には神を楽しませるものと神に媚びるものとがあり、一方では人頭や牛、羊、ニワトリ、豚等の物質を供えて神霊を満足させ、他方では祭歌や経文を唱えたり天地や祖先の神霊の恩徳を讃えたり、ある時には人畜に祟る悪霊たちを呪詛したりする精神活動で神霊を動かした。この精神活動には同時に音楽や舞踊が伴い、それらの動作で祝詞の内容を具現して祈りの気持ちを表現した。しかし、農耕経済が発展し、生産力が増大して定住生活が確立されていくと、人々はもはや採集や狩猟経済の時のような移動を常とする生活には戻らなくなった。人々はすでに灌漑工事や築堤工事等の自助努力により一切の自然を自己の目的に沿うようにする試みを始めていた。このような経済基盤の変化により必然的に意識の変化が引き起こされた。自然を支配したという勝利は人々が自然に直面した時に抱く依存と畏怖の感情を大幅に減少させ、自負心と自身が増強された。この時期には神々の力に対する信仰はまだ消えてはいなかったが、ある程度、さまざまな面から次第に神霊の威厳の影響が薄れてゆき、神に対する祭りが知らず知らずのうちに人のための祭りに変化していった。

そして神を楽しませたり神に媚びたりする音楽や舞踊もそれと気づかぬ間に人が楽しむ娯楽となり、人々が豊作を祝う喜びと化していった。漢民族の春節(旧正月)やその期間の内に行われる竜灯、獅灯等の灯会(訳注①)で見られるように、旧暦の元旦の明け方に何本もの線香をあげて天地に礼拝し、竜灯等の祭りをする行為は確かに雨乞いや豊作の祈願、あるいは竜のトーテムの崇拝に起源をもつ。しかし、それらにはもはや神を楽しませたり神に媚びたりする祭祀楽舞の形態や雰囲気は見られず、今やそれらは人々が豊作を祝い生活が豊かになる希望と理想をのべる表現となっている。又、著者(訳注：劉金吾氏)の故郷である楚雄彝族自治州の首府の楚州市のように漢民族が多く居住しており、彼等は彝族のように松明祭り(火把節)を行うが、その松明祭りの中には火の神への崇拝や祖先神への祭祀・祈願などは見当たらず、松明に松脂(まつやに)を注ぐ時になって初めて“消災免難”とか“快長快大”等といった縁起のいい詞を唱える。

この章でこれから述べる稲作文化の中の民俗舞踊は主として祭典儀式的民俗祭日中の民俗舞踊への変化、即ち神を楽しませる民俗舞踊から人を楽しませる民俗舞踊への変化についてである。このように変化してきたので、ある点では祭祀的な痕跡を留めている舞踊もあるかもしれない。しかしその主要な内容と形式からすればそれはもはや祭祀舞踊には属していない。私はそのように理解している。

訳注① 灯会：元宵節(旧暦 1 月 15 日)に開かれるさまざまな“彩灯”(飾り灯籠)を見る娯楽的な催し。出し物が演じられることも多い。

翻訳： 黛民族舞踊文化財団 藤原明人

参考文献

諏訪春雄『東アジアの神と祭り』雄山閣出版、1998 年

(曾紅「ハニ族の年中行事」)

欠端實『聖樹と稲魂－ハニの文化と日本の文化－』近代文芸社、1996 年

= 自然人 アイヌ =

こころの歌と踊り

アイヌ文化伝承者

四宅 豊次郎

第 11 回 滅びゆく民族といわれ

それまで全くなかった祭事を、古式を源に創造し完成させて、その後も永い年月にわたり継続してゆくことは、まことに並大抵のことではない。

そのひとつの実例として、ぜひ「まりも祭り」について述べてみたい。

では、なぜ「まりも祭り」に関して書くのか、という過程を少し説明しなければならない。江戸末期まで蝦夷(えぞ)と呼ばれていた大地は、アイヌ語でアイヌ・モシリ(静かな国土)と言って、数千年以前から独自文化を有して永永と暮してきたのである。

明治維新後、日本政府は北方防衛と開拓という名目で、先住民であったアイヌに何んの相談もなく、許可も得ず一方的に土足で領土に踏み込んで来た。

そして政府はアイヌ民族を和人に同化させるためアイヌの言語、儀式、歌舞などの風習、生業(なりわい)としていた漁撈、狩猟までも禁じて、その上、土地の移転まで強制させられたのである。このようにしてアイヌは自然と共存共生してきた生活を一変させられ、あらゆる面で苦難の道を辿るようになり、明治、大正、昭和とその歴史の流れの中で翻弄(ほんろう)されてきた。戦後の昭和20年代までアイヌ文化は一部の学者を除くと、一般社会ではさげすまれて評価されることはなかったのである。

仕舞いには学者の中から「滅びゆくアイヌ民族」という言葉まで吐かれて、とうとうアイヌは滅亡の一途を歩む民族との烙印を押される始末になった。

だが、アイヌ精神はそう簡単には滅びなかった。“どっこい生きていたのだ”北海道の各地には少人数ではあったが、祖先から代々伝承されてきた貴重な文化遺産を受け継いだエカシ(長老)やフチ(姥(うば))達が、世間の差別偏見にもかかわらず頑固一徹、懸命に護り伝えてきたからである。

私の母・四宅ヤエは常日頃、特に若い同胞に対して「アイヌの文化は大切なイコロ(宝物)なのだよ。その内きつと世に認められる時代がくるから……」重要な財産であることを真顔で話していた。自分も幼年の頃からよく聞かされたが疎



唄うメノコ (母・四宅ヤエ (中央))

覚(うろおぼ)えで聴き流していたので、母が亡くなって久しい今時分になって、その言葉の重みを理解するようになった。

昭和25年秋に始まった「まりも祭り」は、年に一度10月8日(前夜祭)、9日(まりもを迎える儀式)、10日(まりもを送る儀式)と三日間にわたり厳粛におこなわれ、本年(2004年)で55回を迎える。

地図の上で見ると、阿寒湖という一つの点からの出発であった「まりも祭り」が、それ以後のアイヌ文化復興へ向かって、北海道各地へと大きく波紋を広げていく推進力になったことは間違いないことである。

これから3回「まりも祭り今昔」について書き、その後またアイヌの歌舞について連載することにします。

阿寒湖のマリモ

世界で一番最初にマリモが発見されたのは、1852年(文政7年)オーストラリアのツェラー湖といわれている。

きれいな山間のこの湖も、やがてホテルが建ち並び、観光地として発展してゆくと同時に汚濁して、しまいにはマリモが死滅して一個もなくなってしまった。

記録によると阿寒湖では、明治27年(1894年)10月に郡山某がマリモを発見、宮部金吾博士に送ったとあるが、これにも29年、30年と三つの説がある。

明治31年(1898年)川上瀧弥が植物雑誌に和名マリモ(毬藻)と命名して発表した。マリモは鮮やかな緑色をし表面がビロード状で、そのまま手毬(てまり)に、あるいはキャッチボールの球に使いたくなるような球状の藻である。小さいものは豆粒くらいのものから、大きいのはサッカーボールくらいのもあり、夏ミカン程の大ききで約5、6百年はたっているのではないかといわれている。

マリモは学術的に貴重な、また世界的にも珍しい藻として、大正10年(1921年)3月、国の天然記念物に指定され、後昭和27年(1952年)3月には、丹頂鶴と共に特別天然記念物と改称された。

先住民であるアイヌは、もちろん太古の昔からマリモの存在は知っていたのであるが、何かに利用できるとか生活の足(たし)にはならないので、とりたてて大切にあつかう風習はなかった。むしろマリモの群生している湖底の辺りは、あまり魚類もいないので、アイヌ語でトーラサンペ(湖の霊(みたま))とか、トーカリップ(湖のつくったもの)と呼んで、近づいたり触ったりすることもなかった。

母・ヤエが若かった頃、メノコ(アイヌの女性)達は風波により湖岸に打ち上げられたマリモを拾ってきて、きれいに洗って手で押えて水分を抜き乾燥させ針差しに利用したり、スポンジのようにクッションがあるから布で



ツェラー湖

くるんで枕にしたという話を自分も聞いたことがある。もちろん国の天然記念物に指定される以前のことである。

阿寒湖の観光船に乗るとガイド嬢が「セトナとマニベ」のマリモの伝説を聞かせてくれるが、これはアイヌの伝説ではない。

大正時代に朝日新聞の記者をしていた青木純二の創作とされ、ロマンチックな悲恋物語です。アイヌは、元来マリモに対してよい印象をもっていなかったもので、マリモに関する伝説も二、三あるが美化されることなく、かえって悪者あつかいされる立場におかれている。大自然と共存してきたアイヌ民族は、日常の暮しで必要なものは大切にみつかが、単に珍しいとか貴重であるということだけでは、あまり目をくれない

阿寒湖のマリモ



マリモ集団の露出

(昭和 25 年 4 月 14 日・ケネタイペツ)

マリモの受難

マリモや高山植物を盗み採ることは、かなり以前から行われていたらしい。

昭和 8 年には、釧路警察署と釧路営林区所長の連名で、阿寒湖畔住民に対して、天然記念物マリモと高山植物の盗み採りに対する警告書を出している。

その後も幾年か、これらの盗み行為は大なり小なり隠れておこなわれていたものと推測される。しかし、そのうち昭和 16 年には太平洋戦争に突入、趣味でものをゆっくり観賞する時代ではなくなった。

昭和 20 年 8 月 15 日敗戦。

やがて、日本国民は敗戦の痛手から立ちなおるため復興へといそしむ。

少しずつ世情も落ち着きを取りもどし、生活が安定してくると、温泉地に行つて湯治をして身体をゆっくりやすめたいという気になり、また観光地を巡つて大自然の美しさを、心行くまで堪能して気持を癒した。

節約して旅費をつくり、せっかく来た阿寒湖！数知れない程あるマリモだから、旅の思い出と共に家の土産にと、特に罪悪の意識もなく気軽に持ち去つたことでしょう。

モーターボートの船頭に酒代を握らせると、二つ返事で大きな網が船内に持ち込まれたり、あるホテルでは宿泊した客に記念品として差上げていたという話もあった。

ひもじい時代のことから空腹を満たすため、金に換えられるものなら何でも売つた。

いわゆる竹の子生活である。

また、金になることなら手段を選ばない。

闇屋が活動し、掻っ払い(かっぱらい)が横行した。

畑のジャガイモやカボチャ泥棒から、石炭や薪、電線、学校の窓ガラス、ひどいものは漁船の機械やシャフト・スクリューまで掻っ払いの対象になった時代である。

また、札幌や東京などの都市へ出張するとき、トランクには着替えの下着や必需品を入れるのではなく、水分をしぼつたマリモをいっぱい詰め込んで持って行き、売りさばくと珍しいという

ことで、たいそう銭(ぜに)になったということなど、まことしやかに囁(ささや)かれていた。

このような時代の背景があつて、多量少量のマリモを売りさばく者がいても、不思議ではなかったのでしょう。

マリモに降りかかる災難は盗難ばかりではなかった。木材運版のための「鉄砲流し」によって大きな被害がでた。鉄砲流しとは、小川をせき止めて水を溜め、その後せきを切って鉄砲水のような急流を利用して、貯木を一気に湖水まで流下させる荒っぽい搬出方法であるから、その地域のマリモは押し潰されて全滅することになる。

台風などの大風波により無数のマリモが湖岸へ打ち上げられて枯死することもあった。

戦後の産業復興のため、阿寒川流域の水力発電所の電力強化をはからなければならない。水量の使いすぎによる阿寒湖の水位の低下により、マリモが湖面から露出して、直射日光を受けて茶褐色に変色した。

いわゆる「マリモが大事か、それとも電力か」の問題が生じて大論争をまきおこした。

このような混乱の中で「今のうちにマリモを護らなければ絶滅してしまう」「盗まれたマリモを母なる阿寒湖に返そう」「電力や自然破壊から阿寒湖を守りマリモを大切にしよう」という叫びが住民の間に盛り上がってきた。特に、地元住民がマリモを盗んだり、盗採する者に手を貸してはいけないと、自らを厳しく律して「違反者は村八分にしまえ！」といわれたほど、マリモの盗難に対する関心の度合いと深刻さがうかがわれる。

阿寒湖は、大自然がありマリモがあつてこそ大勢の観光客が来てくれる。もしも、阿寒湖にマリモが無くなったら、道東一の観光基地としての座を守ることはおろか、魅力がうすれて観光客が半減するかもしれない。

このような惨状の中で、昭和24年10月「阿寒湖マリモ愛護会」が結成された。

愛護会の最大の目的は、第一に盗まれて全国に散っていったマリモの返還運動であり、第二には阿寒湖周辺の自然破壊や汚染防止であった。



第40回まりも祭り（平成元年10月10日）
（舟の櫓をこぐ）四宅豊次郎



中国雲南省大理市（中国人民美術出版社＋美乃美『雲南の旅』より）

平成16年度黛民族舞踊文化財団活動予定

平成16年5月14日（金）黛民族舞踊文化財団総会

7月4日（水）国際舞踊祭（赤坂区民センター）公演に黛民族舞踊団参加

11月10日（水）～11月20日（土）黛民族舞踊団訪中

（中国雲南省昆明市・大理市・怒江県）

研究報告誌出版予定

舞踊文化 E. T. C. No. 13 発行

民族舞踊文化 No. 16 発行

編集後記

舞踊文化 E. T. C. は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をお待ちします

平成16年5月14日 財団法人 黛民族舞踊文化財団

港区赤坂3-10-3 電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639